

2026年5月17日 第二礼拝

説教題『嵐の中の主の食卓』使徒言行録27章21～38節

主任牧師 加藤 誠

「だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです」(使徒言行録27章34節)

「信仰こそ旅路を導く杖、弱きを強むる力なれば」(新生讃美歌 519 番)は、多くの人々に親しみをもって歌われている賛美歌です。モーセは出エジプトという大きな使命に押し出されるにあたって「これを取りなさい」と「杖」を手渡されました。「杖」とは「神が共に歩むしるし」。モーセはその「杖」を手にとって、イスラエルの民をエジプトから導き出すという、困難きわまる四十年の旅を歩み通したのでした。

先日の朝の祈祷会である方が言われました。「何事が起こっても、そこに恵みがあり、感謝できる信仰をいただいていることはわたしの大切な宝だ」と。その言葉を聞きながら一人の方を思い起こしました。Iさんという五十過ぎの男性です。「バプテスマを受けたら何か良いことがあるのかなと期待していたら、私の場合、会社の倒産という最悪の出来事が起こった。なんだ、クリスチャンになった途端に失業か！とつぶやいたけれど、主イエスと共に歩む信仰によって最悪の出来事を冷静に受け止め、クリスチャンの弁護士さんの助言を受けながら、会社の同労たちと人生の危機と一緒に乗り越えることができて、あとから神さまの恵みにしみじみ感謝した」と。クリスチャンになったら、事故からも病気からもすべて守られて順風満帆な人生に導かれるかという残念ながらそうではありません。しかし「どのような困難の中にも主は共に歩んでくださり、主は必ず恵みを見せてくださる」という信仰を私たちは聖書からいただいています。その信仰は、私たちそれぞれの旅路を導く大切な「杖」であり、弱くくじけそうになる私たちを強める力なのです。そして使徒言行録のパウロもまた、信仰という「杖」を手に取り、主イエスの福音を伝える使命に生かされた人でした。

ユダヤ人たちの憎しみを受けて殺されそうになりながらも、主の不思議な働きに守られたパウロは、いよいよ皇帝のもとで裁判を受けるため囚人としてローマに護送されることになります。しかしパウロたち囚人を護送する船が地中海で嵐に遭い、難破寸前に追い込まれます。実はパウロは今の季節の出航は止めた方が良いと忠告したのですが、船主たちが出向を強行したために遭難してしまったのでした。船はひどい暴風に悩まされ、積み荷も船具もすべて投げ捨てますが、幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、助かる望みがまったく消えうせ、船員たちは船から逃げ出そうとしたくらいでした。しかし、その時に陣頭指揮にあたったのが、囚人パウロでした。パウロは言います。「しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として、命を失う者はないのです」と。そしてこのあとパウロの冷静で的確な指示が船の人々を救うのです。

嵐の中でパウロは「一堂に食事をするように勧め」(33 節)ます。「『だから、ど

うぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本も失われることはありません。』こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた」（34～35 節）と。まるで五千人の供食の場面の主イエスを見ているようです。パウロからパンを手渡された人たちはどれだけ励まされたことでしょうか。そして、驚くべきは 37 節「船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった」というルカの記述です。「おおよそ三百人だった」と書きそうなところをしっかりと一人ひとりのことを数えている。きっとパウロが指示をして点呼させたのでしょう。「一人も犠牲者を出させない。必ずみんなで生き延びるのだ!」というパウロの強い決意がそこに見えてくるようです。

しかしながらこの後、船は座礁し、激しい波で壊れだしたため、兵士たちは囚人たちが泳いで逃げないように殺そうとはかります。なぜかというと、囚人を逃してしまうと護送していた兵士の責任が問われ、その囚人の刑罰が兵士たちに課せられてしまうからです。兵士の行動としては当然のことでした。が、百人隊長はパウロを助けたいと思い、この計画を思いとどまらせ、結果として乗組員全員、つまり二百七十六人全員が助かったとルカは書いています。百人隊長は嵐の中で陣頭指揮に立ったパウロの言動の一部始終を見ていて心から敬意を覚えたのでしょう。それほどにパウロのリーダーとしての行動が際立っていたということなのだと思います。

もし当時に新聞があれば「囚人パウロ、難破した船の全員を救う」とでも大きな見出しで紹介されそうな出来事です。が、しかし、使徒言行録を読んできた私たちは知っています。この嵐の中でパウロと共にいて、パウロに語りかけ、励まし、適切な言葉と行動に導かれた方がいたことを。それは十字架の主であり、復活された主イエスです。パウロにとって主イエスは過去の人ではなく、今、このとき自分と一緒に歩み、一緒に伝道し、一緒に労苦を味わい、励ましてくださる、生きた方でした。実際パウロは、嵐の中で「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、（あなたは）ローマでも証しをしなければならない」（23・11）と天からの天使が自分の傍らで語るのを聞いたのでした。天使の言葉は主イエスの言葉であり、パウロは激しい嵐の中に主イエスと共に、主イエスの語り掛けの中に立てられて歩んだのです。

復活は二千年前の過去の出来事ではありません。この困難あふれる世界の中を歩む私たちを力づけ、励まし、導いてくださる方と一緒に信仰の旅をしていくことです。今朝のこの出来事の中で、嵐の大波に揺さぶられ漕ぎ悩む船は、今の世界の中で理不尽な暴力に翻弄される「神の国を求める小さな群れ」（ルカ 12・32）を象徴しているかのようです。教会とかクリスチャンだけでなく、神の国と神の義を求めてやまない人々が小さくされ、困難に押しやられている世界の現実があります。しかし復活の主は、そのような「小さな群れ」と共にあり、嵐の中で主の食卓に招いて励まし、神の国の使命に固く立たしめてくださる。これが使徒言行録のメッセージです。この方の声をあやまたず聴いていきましょう。